

[ 翻訳 ]

## ルードン著 『証明されたる人口と食物の均衡』

柳 田 芳 伸

### 訳者序言

ここに訳出しようとするのは、販価 1 シリングの Charles Loudon, M. D., *The Equilibrium of Population and Sustenance Demonstrated: Showing on Physiological and Statistical Grounds, the Means of Obviating the Fears of the Late Mr. Malthus and his Followers* (Leamington-Spa: Longman, Rees, Orme & Co., 1836), 15pp の全訳である。Charles は英語では「チャールズ」と呼称されるが、仏語では「シャルル」と音声表記される。この名称の特定はともあれ、この小冊はルードンが後年に刊行する仏語本『人口と食物の問題の解決：一連の手紙で 1 人の医者に従うことで (*Solution du Problème de la Population et de la Subsistance, Soumise a un médecin dans une série de lettres*)』<sup>1)</sup> (パリ、1842年) 336頁に先行する簡略版と約言することができよう。ルードンのこれらの著作はこれまでけっして黙殺されてきたわけではない<sup>2)</sup>。とりわけ伊藤久秋氏が逸早く指摘されている<sup>3)</sup>ように、プルードン (Proudhon, Pierre Joseph, 1809-65) が『経済的矛盾の体系、あるいは貧困の哲学』(1846年) の中でかなりの紙幅を割いて、ルードンの「授乳の生理学的原理」(73頁) に言及し、論評している。ここでこれを看過することはできないであろう。その梗概を摘記しておこう。

プルードンは、ルードンが提唱した生後14ヶ月間の哺育と生後14ヶ月後以降3歳に至るまでの乳幼児に対しては母乳に加え、牛または山羊の乳、

あるいは澱粉<sup>4)</sup>または植物性食物で育てるという出生抑制法を「3年授乳の方法<sup>5)</sup>」と命名し、ルードンを「たいへん博識で...純粋な道德、高度の哲学、民衆への深い愛情<sup>6)</sup>」の持ち主であると称賛する。しかし同時に、ブルードンはルードンの所論を「原理においては極めて合理的だが、それは専ら生理学の理論にすぎず、社会経済学にとって全く枠外の理論であるという点に致命的な欠陥をもつ<sup>7)</sup>」と批評してもいい。すなわち、ブルードンは「3年授乳の方法」に対して「4人の子を持つ母親に16年間の奴隷状態を強い...〔社会的役割を担い始めた〕女性を動物のレベルに退歩させ...貧困を相変わらず別の貧困で置き換えることにほかならない。」(亀弧内引用者)という手厳しい論難を浴びせる。そして「貧困の原理は人口でなく、独占」であり、「社会は独占によって腐敗したように、社会は〔生産をしないで生活を楽しむ〕女性によって腐敗する<sup>8)</sup>」(亀弧内引用者)と論結している。

ところで、そもそもペティ (Petty, William, 1623-87) やジュスマルヒ (Süssmilch, Johan Peter, 1707-67) などが既に母乳哺育による避妊効果<sup>9)</sup>を観察していた<sup>10)</sup>。またバカン (Buchan, William, 1729-1805) の『家庭の医学』(1769年) やコベット (Cobbett, William, 1763-1835) の『若き人々への提言』(1829年) 等が一樣に母親による母乳哺育の重要性を唱和してもいた<sup>11)</sup>。それゆえこの点に関してルードンの独自性があるとするなら、マルサスが人口の予防的妨げの1つとして母乳哺育を認識、編入していないと力説している点であろう。マルサスはアメリカの土人やアフリカの黒人が数年間授乳する習慣 (habit of suckling) に伴う避妊について知得していたけれども、それは夫婦が授乳期間中別居することから生じていると解していた<sup>12)</sup>。したがってルードンがマルサスの『人口論』の不備をついているとはいえよう。

とはいえマルサスが文明社会の、わけでもイギリス社会の母乳哺育を等閑視していたとするのは早計であろう。その証左の1つは、「医師以外の知識人たちが母乳哺育に関心を示すようになったのは、ルソー (Rousseau,

Jean Jacques , 1712-78) の『エミール』〔1762年〕公刊以後であった<sup>13)</sup> ( 亀弧内引用者) とされていて、周知のようにマルサスの父ダニエル ( Daniel, Malthus , 1730-1800 ) は心底からのルソー崇拜者であり、乳幼児期のマルサスが『エミール』を指南書にして育てられた<sup>14)</sup> ことにある。例えば、マルサスが「 幼児の主たる価値は…父母の愛の対象たるところにある」と述べ、「 子供に対する親たるの慈愛と配慮」を重んじていた<sup>15)</sup> ことを考え合わせれば、マルサスが母乳哺育による母子愛の形成を蔑ろにしていたとは到底想像し難い。またマルサスが高い乳幼児死亡率を深憂し、「 子供たちの悪い育児 ( bad nursing ) 」<sup>16)</sup> を積極的妨げの 1 つとして槍玉に挙げている<sup>17)</sup> ことも論拠になろう。フランス<sup>18)</sup> に比べて、イギリス ( とくに農村部 ) では乳母ではなく母親が哺育することが多かった<sup>19)</sup> けれども、都市部では、「 母親が働くために離乳を余儀なくされた乳児は近隣の老人に預けられ、パン粥やオートミールなど消化できない食物やアヘンを成分の含む鎮静剤を与えられる<sup>20)</sup> といった事態がしばしば惹起していた。もちろんルードンもこうした事実に通じていたと推されるけれども、事この点に限るなら、むしろマルサスの方がより意識していたように思われる。

同様に、ルードンによる「 植物性食物」と「 動物性食物」との分類 ( 72-3頁) やジャガイモへの言及も、マルサスの所見<sup>21)</sup> と大同小異であると概括しても大過ないであろう。ルードンが 1 人あたりの 1 回分の食事をおよそ454グラムのジャガイモ<sup>22)</sup> と見積もっている ( 72頁) のは穏当な推算ではあるけれども、余りにジャガイモの社会的普及にとらわれ過ぎると 1 つの偏見に陥ってしまう恐れがあるろう。例えば、サラマン ( Salaman, Redcliffe Nathan , 1874-1955 ) は「 ジャガイモを用いることによって… 実際、労働者はぎりぎり最低限の賃金で生き延びることが可能になった。こうして、ジャガイモはイングランドの大衆の貧困と劣悪をもう百年間引き延ばし、促進した<sup>23)</sup> 」と説明してくれている。こうした高見を忘却してはならないであろう。

序言の最後として、*Dictionary of National Biography* ( Oxford: Oxford

Univ. Press, 2004), Vol.24, pp.473-4に依拠しながら、ルードンの略伝を付記しておきたい。ルードンは1801年の秋にラナーク州のパロニーで呱呱の声をあげ、18年にグラスゴー大学に入学し、27年に同大学から医学修士号を取得した。その間、遅くとも26年には、ロンドンの王立外科カレッジのスタッフとなり、26年に『角膜除去の失敗の要因に関する僅かな考察』を発表した。28年になると、既に王家や貴族から常客を獲得していたウォリック州にあるリーミントン・スパの医者として独立する傍ら、『リーミントン・スパの水に関する実際的論説』を刊行したりもした。その中で、この新しいスパ保養地で提供できる治療や快適さを紹介すると共に、スパの水が万病に対して薬効があるわけではないことを伝えもした。

ルードンは当初はベトフォード・ハウスで治療を開始したけれども、程なくクレランドン広場に居を新築し、転居した。いずれの居所もリーム川の北側に位置する新興の当世風の町にあった。その後医業は順調で、32年には、無月経を治癒するためにヒルを乳房に利用するという内容の論文などを医学誌に寄せたり、また『ランセット』誌にも月桂樹の葉の医学的利用について寄稿したりした。翌年には、工場における児童雇用に関する王立調査委員会に1員に指名され、3人の医療委員の1人として、ヨーク州北東部、レスター州、及びノッティンガム州の状況を調査した。41年に至り、パリの地に隠居し、最後は44年2月2日にルクセンブルグ9番通りで息をひきとった。

(注)

- 1) ルードンはこの大冊の中で、13通の書簡を通して、幼児が3歳に達するまでの母親による哺育を法で定め、かつ医学的、道徳的、及び宗教的教育を推進していけば、満足いく(contented)人口(21歳で結婚した女性の産児数が3~4人となると、人口はいずれ停止する)を実現すると主張している。
- 2) 例えば、南亮三郎編『人口大事典』(平凡社、1957年)863頁、D.E.C. Ever-  
sley, *Social Theories of Fertility and the Malthusian Debate* (Oxford: the Clarendon Press, 1959), p.202、及び南亮三郎著『人口学総論』(千倉書房、1960年)197頁。

- 3) 伊藤久秋著『マルサス人口論の研究』(丸善、1928年)246頁。
- 4) 澱粉性食物 (farinaceous food) はくず粉 (arrowroot)、ひき割り穀物 (prepared groats)、粗挽き小麦粉 (semolina)、小麦粉、パンなどと比べて、「赤ん坊に与えられ得る紛れもない最良の食品であった〔小川富士枝著『イギリスにおける育児の社会化の歴史』(新読書社、2004年)19-20頁〕。
- 5) ピエール=ジョゼフ・プルドン著齊藤悦則訳『貧困の哲学(下)』(平凡社、2014年)538、540頁。
- 6) 同訳書536頁。
- 7) 同訳書537頁。
- 8) 同訳書540-1頁。
- 9) 現代では、乳頭に加わる吸啜刺激が排卵を抑制することや、反対に持続的な吸啜期間が過ぎると、母親は発情し妊娠するようになることが立証されている〔山本高治郎著『母乳』(岩波書店、1983年)16-7頁〕。
- 10) ペティは1660年以降の論稿「土地と人手」の中で長い母乳哺育 (sucking) が人口増殖を妨げるとははっきりと指摘している〔Marquis of Lansdowne, *The Petty Papers* (London: onstable & Company Ltd., 1927), Vol. , p.194〕。またジュスミルヒも第2版『神の秩序』(1761-2年)において農村婦人がその2~3年の授乳期間に妊娠することは殆どないことを明記している〔岡田實著『現代人口論』(中央大学出版部、1996年)190頁。ちなみに18世紀フランスにおいても、「乳を与えていれば新たに妊娠することはないというのが」世間一般の通説であった〔クニビレール (Knibichler Yvonne)、フーケ (Fouquet, Catherine) 著中嶋公子・宮本由美ほか訳『母親の社会史』(筑摩書房、1994年)121頁、また入来典著『赤ちゃんの歴史』(鳥影書房、2000年)114頁も参照〕。
- 11) スマウト (Smout, Thomas Christopher, 1933-) 著木村正俊訳『スコットランド国民の歴史』(原書房、2010年)267-8頁、ウィリアム・コベット著庄司浅水訳『若き人々への提言』(東京書籍、1990年)188-92頁を参照。
- 12) Malthus, T. R., *An Essay on the Principle of Population*, 2<sup>nd</sup> ed. (London: J. Johnson, 1803), pp28, 103-4〔吉田秀夫訳〔各版対照人口論』(春秋社、1948年), 54, 161頁〕。ちなみにヨーロッパでも、「宗派によっては6週間ないし6ヶ月間、授乳婦人を男性と接触させないという戒律があった」〔入来前掲書110頁〕。
- 13) 入来前掲書106頁。クニビレールほか前掲訳書182-90頁も参照。とくにピューリタンたちは母乳育を自然な養育法とみなしていた〔拙著『増補版マルサス勤労階級論の展開』(昭和堂、2005年)118頁注64〕。
- 14) 南亮三郎著『マルサス評伝』(千倉書房、1966年)13-5、20-2頁。

- 15) 前掲拙著110頁注12。
- 16) nurse という語は必ずしも乳児に授乳する乳母を意味するのではなく、子供部屋を取り仕切る老練な女召使なども含意した〔三井淳子「子育て支援体制の構築をめざして」伊藤航多・佐藤繭香・菅靖子編『欲ばりな女たち』(彩流社、2013年)所収、238頁注51〕。
- 17) 前掲拙著88頁、110頁注12。
- 18) 1780年頃、パリで1年間に生まれた乳児2万1千人の内、母親から授乳されたのは僅かに千人足らずで、住み込み乳母に育てられた特権階級の乳児千人程度を除く多数の乳児たちは、パリやパリ近郊の乳母ばかりか、遠隔地の乳母のもとに里子に出され、実母と会えるのは年に1~2度という有様であった。またこうして里子に出された乳児の死亡率は母親が哺育した乳児のその1.5~2倍であった〔入来前掲書120-2、146頁や山本前掲書78-80頁を参照〕。ちなみに1840年代に至っても多くの乳児が依然乳母に預けられていた〔クニビレールほか前掲訳書288頁〕。
- 19) ロンドンの一握りの富裕な市民層を除いて、「イギリスでは乳児の圧倒的大部分は家庭内で母乳で育てられ」ていた。また18世紀後期の母乳哺育期間はおよそ8~10ヶ月程度であった〔マクファーレン (Macfarlane, Alan, 1941-) 著船曳建夫監訳『イギリスと日本：マルサスの罫から近代への跳躍』(新曜社、2001年)325-6頁〕。
- 20) 中村勝美「近代イギリスにおける子どもの保護と養育」橋本伸也・沢山美果子編『保護と遺棄の子ども史』(昭和堂、2014年)所収、103頁。
- 21) 前掲拙著94-6頁。
- 22) アイルランドでは、1820年以降ジャガイモの品種が悪化し始め、1835年にはぼそぼそして水っぽいらんパーが南西部の貧民の大半の常食となっていた〔フェイガン (Fagan, Brian) 著東郷えりか・桃井緑美子訳『歴史を変えた気候大変動』(河出書房新社、2009年)332-3頁〕。
- 23) R. S. Salaman, *The History and Social Influence of the Potato* (Cambridge: Cambridge Univ. Press, 1949), p542、またトムスン (Thompson, Edward Palmer) 著市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』(青弓社、2003年)376頁等も参照。

## 凡 例

- 1．原文にある（ ）は訳文でもそのまま表記している。
- 2．原文にある italic 部は斜字で示している。
- 3．原文で\*等で表記されている原注には通し番号に置換し、上付けにした。また訳者が上付した訳注は〔 〕の中に、それぞれ該当する通し番号を記入し、訳文の適切な個所に配している。
- 4．訳文中の〔 〕の中の人名、年号、字句等は訳者が便宜上補足したものである。

## 訳 文

医学博士・チャールズ・ルードン（工場における児童雇用に関する王立調査委員会の元委員）著『証明されたる人口と食物の均衡：マルサス氏や彼の追従者たちが近年提起した危惧を医学的及び統計的根拠に基づき払拭する手段を提示することを通して』（リーミントン・スパ：バース通り37番地ジョン・フェアファクス刊；ロンドンのロングマン・リ - ス・オーム社販売）1836年． 販価 1 シリング．

「人口と食物との間に本来存する関係に関する問題は経済学の全領域における途方もなく興味をそそられる問題である。それは、何よりもまず哲学者、為政者、及び人間性を有した人々の関心を引いている。」国会議員・スクロプ<sup>(1)</sup>〔Scrope, George Julius Poulett, 1797-1876〕著『経済学原理』（ロンドン、1833年）、256-7頁．

その従順たる忠実な下僕である著者によって本著はスペンサー伯爵<sup>(2)</sup>閣下に捧げられる。

リーミントン・スパ 1836年 1月22日

人口が小土地割り当て<sup>(3)</sup>によって過大に増加するであろうという見解は、世界の地上が空腹の人口で埋め尽くされるにとどまらず、人類が最大の窮乏で覆い尽くされるであろうという見解と同様に、経済学における至上の誤りである。それは文明化や貧民の福利の進歩を遅らせるものと思われてならない。多くの夢想家たちは幻想の域にとどまったままであり、彼らの想到する所では、必ずや人々が地球を埋め尽くし、人類は互いに貪り合うことを余儀なくされることになる。こうした見解や、子孫を扶養できないという懸念に駆られて、近年ある学説が広まってきている。それを提唱している人たちは不名誉であるばかりか、道徳という利益にも有害であろう。そこで、本冊子では、必要とされるなら、道徳的で、かつ健康的なある妨げをどのような方法で適用しえるかを生理学的に示そうと試みたい。この場合に限らず、あらゆる他の場合においても、それは専ら、神智でもってこの世に配し給われた人々の幸福や福利を促進するよう神意によって精妙に配剤された自然の法則に基づいている。

わが国における人口増加は10年置きの国勢調査の毎に、約10パーセントである。別言するなら、年間1パーセントの増加である。また懐妊期間と授乳期間を合算すると、およそ19ヶ月である。懐妊期間は本性上9ヶ月で不変であり、授乳期間の方は概して個々の国の特有の習慣によって調節されている。平均すれば、わが国やヨーロッパの大半の国では通常10ヶ月である。

母親が授乳している間は受胎しないということは一般によく知られている。もちろんこの通則には例外がある。とはいえ、これらの例外を斟酌して、仮に授乳期間が人口の増加に合わせてほんの2、3ヶ月だけ延長されれば、逆も真なりで、人口と食物との均衡問題は解消されるのみならず、程なく示す理由から、授乳期間の延長は母子の両者にとって何の不都合ももたらさない。

大陸では、現在1結婚あたりの平均子供数<sup>1</sup>は約4.5人である。先般の2度の国勢調査から得られる平均結婚年齢や人口から推算すれば、イングラ



ンドの数値もまた4.5人である。仮に授乳期間を引き延ばし、平均子供数を4人にまで減らしたなら、人口が停止するのは明白であろう。なんとかなればわが国の人口（numbers）の半数<sup>2</sup>は出生してから24歳に至るまでの間に昇天しているからである。ちなみに婦人の平均結婚年齢はほぼこの24歳である。フランスでは、その平均結婚年齢<sup>3</sup>は26歳である。男性のそれは29歳で、女性のそれは24歳である。イングランドの結婚年齢は現行の登録制度の下では正確には把握できない。とはいえ安んじて両性に対してフランスの数値を採用できよう。

従って、婦人の結婚期間は24年であり、かつ子育ての期間が44歳で終わるから、各々の子供の間隔の平均は54ヶ月か、あるいは54.5ヶ月かであろう。

次に当然湧いてくる問いは、イングランドでは目下授乳が進んでいくけれども、10ヶ月の哺育をどれほど延長すれば人口を妨げるに至るであろうかである。解答は極めて簡単である。どの場合であれ、懐妊が9ヶ月で、哺育が10ヶ月であり、それに現在の人口増加に対応するのが残りの3.5ヶ月であると想定できるなら、授乳期間は13.5月となる。加えて、3つの授乳<sup>4</sup>の事例の何れの場合でも、一度は受胎が生じるという仮定に立てば、3ヶ月と6週での受胎に代わって6週での受胎をも考え合わせねばならない。こうして全授乳期間は15ヶ月となる。換言すれば、現在の期間に比べて3分の1長くなるであろう。授乳のこの延長は自ずと各々の子供の間隔を4.5年からおよそ5年にまで拡大するに違いない。その結果、1家族あたり4.5人の子供が4人に減少する。既述したように、わが国の人口の半数は女性の結婚年齢に達するまでに夭折する。それゆえこの帰趨として、わが国のあらゆる家庭においては、父母の後継者が1人ずつ残っていくにすぎないであろう。

何らかのある理由から、この国の母親たちは通常子供たちにおよそ10ヶ月以上も母乳を与えない。これを生理学的理由から説明するのは難しい。乳（milk）の質に関しては、10ヶ月に至っても著しく低下しないのは確か

である。その質の変化に起因していないことは確実であるから、それは10ヶ月を過ぎても流動食（spoon）をとらないまま育った子供たちの健康という理由からである。子供たちが離乳するまでに母親の乳房を求めることができるほど慣れてきているのを間々目にする。そしてこのことに注意を払っている人たちは、このように授乳している母親の健康が近隣の人たちの健康に比べても少しも見劣りしてないことに気付いている。現実には、以上のすべてことを考え合わせれば、非常な確信をもって、母親は妊娠期間に比べて授乳期間の方がより健康的であり、病気や死に陥る危険がより少ないと断言できるであろう。一般開業医なら誰でも知っているように、多数の婦人たちが授乳を始める直前の月までずっと働こうと思ったり、あるいは働こうする姿勢を見せたりする優柔不断は目には見えない道徳的、ないしは肉体的原因から生じていることが多い。それゆえ授乳の当初は両親が授乳のせいにするには決してない。母親がその時には自分の身体で非常に長い間十分引き受けることのできる不可欠な義務を果たしていると思っているからである。しかし慣習や風習によって認められた授乳期間が経過すると、その瞬間母親は自然の意志を超えているという思いに駆られる。だからどのような不愉快な気持ちであれ、湧いてくれば、すぐさま授乳を打ち切る。その際、その子は離乳される。

自然は慣習が授乳を求めているよりも長い期間にわたって母親に母乳を給しているので、自然が母子のどちらの側から見てもある良い結末を用意してくれていることも否定し難いであろう。もしそうでないなら、自然は懐妊期間を一定に定めたのと同様に、母乳という分泌のある決まった時期に打ち切ったであろう。人の子供は下等動物の子に比べてとても長い間自分で食をとれない。この事情は、自然が今日充てられているよりもずっと長い期間の授乳を許しているという既述の主張を強力に裏付ける証左である。一般に信じられているように、何人かの古来のフランスの作家たちは自然の摂理（the laws of nature）に従って、離乳期をおよそ15ヶ月と定めた。彼らは幼児が大体15ヶ月で8本の門歯と4本の犬歯とを備えると考

えた。デソルモー（Desormeaux）<sup>5</sup>は生後3年、4年、5年、さらには7年にわたって子供たちに乳離れをさせない母親の例を挙げている。

授乳期間が様々な国で人口に多大な影響を及ぼしていることは夥しい事実によって立証されている。人口が過大すぎて、住民が嬰兒殺しという非人間的な悪弊に染まっている中国<sup>6</sup>では、「子供がその手を口にいれるようになると、速やかに離乳し、右手の使用を教える。」。他方、ハンター〔Hunter, John Dunn, 1798 ? -1827〕は『北アメリカのインディアンの間での束縛に関する回想』の中で、その子供たちが十分に月日を重ね、力強くなれば、インディアンの母親たちは「子供たちに離乳を迫り、通常2～3歳の間は子供たちを自由に遊ばせている。」と言及している。他の未開人と対比し、さらには文明国民とも比べてみる時、こうした事態は単にある肥沃な国におけるこれらの部族人口の鮮少さ（thinness）を説明するにとどまるであろう。ローウェンフェルド〔Lowenfeld, George〕博士はベルビス南部、エスクイボ、そしてデメラクに及ぶカリブ海の諸部族の間での授乳の似通った普及に触れている。またその記述によれば、人口はその土壤の肥沃に比例して異常に少ない。さらに見落とせないのは、7人または8人といった家族数が殆ど知られていないということである。ジャマイカにおける黒人人口の減少についても同様の原因が存していそうである。すなわち、ジャマイカに住むマルーン〔西インド諸島の山中で暮す黒人〕に限らず、輸入されたアフリカ人の中での黒人人口の減少についての満足いく説明は上記の事情からなされるであろう。それはフォウエル・バクストン〔Buxton, Thomas Fowell, 1786-1845〕氏が下院に2, 3年前に持ち出した植民者の残酷についての疑わしい話よりはずっと信憑性がある。

しかしここでは、人類に対する将来の窮乏という懸念（多くの慈悲深い人たちは紛れもなく現在この懸念にとらわれている）を和らげるという観点から、1つの道徳的で、かつ健康的な妨げに注意が向けられる。とはいえわが国の現状にあっては、この信念を勧奨しようとするつもりはない。

ステュアート〔Stuart, James, 1775-1849〕氏のアメリカ旅行〔『北アメリカでの3年』(エディンバラ、1833年)〕や『クォーターリー・レヴュー』の最新号<sup>8</sup>によって表示されているように、人口の食物(sustenance)に対する関係を考察したことのある人たちの目には明らかに次のように写っているに違いない。すなわち、西洋世界のおいてだけでも、人類の食物生産用の資源は来たる悠久の歳月にわたって生じうるあらゆる人口増加に対応するものである。技術や科学の進歩による農業改善の限界を予見することができないから、わが国の人口でさえ、食物不足の心配を招来しないでは、人口の限界にまで到達しはしないであろう。厳密に植物であるある生産物の類に関して言えば、小片の土地の地表から産する多大な作物の例としてここで言及するのは、ビートの根、現代キャベツ、ジャガイモ、並びにスウェーデン蕪にすぎない。そしてこれらの植物性食材は古代人には未知なものであった。排水、踏み犁耕作、及び多様な種類の肥料から生じる改善が穀物量を増大するのに大いに役立つ。近年の開閉式牛舎飼育の導入は動物性食物(animal food)の貯蔵に非常な貢献をなすであろう。これらに加えて、新鮮な魚を海岸から内陸部に運ぶ広範囲にわたる手段や、目下全国各地で建造中の鉄道によって農業のみならず人間に必要な不可欠ありとあらゆるものが、実際にまさに2, 3年で重要な変貌をとげるであろう。改善が限りなく不可能に近いと推される地域でさえそうであろう。連合王国には76.5百万エーカー<sup>9</sup>の土地があり、このうち30百万エーカー<sup>10</sup>の土地が未墾地のままであり、またこれら30百万エーカーの未墾地のうち15百万エーカー<sup>11</sup>は改善の余地があると言われている。マキ〔Mackie, Willamはディロムの1796年の著書に1補遺を付加している〕氏やアンダーソン<sup>12</sup>〔Anderson, James, 1739-1808〕によれば、ジャガイモの平均的な収穫を産み出している1エーカーの土地は各々30トン、つまり年間67,200ポンド重量を生産するであろう。それを42人に対する食事として、365日で割れば、年を通して1日4ポンド重量(4度の食事分あるから、1回分は1ポンド重量)を給するであろう。それゆえ、ジャガイモ畑1エーカーは人々

が1億人に、あるいは現在の人口の4倍に達するまで間断なく植物性食物（vegetable food）を生産するであろう。つまり、わが国の植民地や海外の他国から輸入できるものは別としても、残る74百万エーカーの土地を動物性食物や穀物（grain）の生産に充てることができるのである。

多様な穀物類（crops）の輪作や変更を、あるいはまた移民委員会が改良できないと報告した15百万エーカーという大規模な土地がどれくらい先に耕作地に転化できるかを話題に上らせるのは当面の課題ではないであろう。古代人と同じくらい未知であるパレスチナ、ギリシア、及びイタリアの巨大な人口<sup>13</sup>に関する史料それ自体は、近年、農業方法の進歩と同様に驚くべき進歩を遂げてきている。これらや、不毛地のことについて記載しているイタリア<sup>14</sup>やドイツの著者<sup>15</sup>に少しばかり言い及ぶなら、最も改善の見込みのない土質の土地に何を施したら良いのかに関して何らかの着想が得られるであろう。ここで話頭を主として医学に関連した2つの事実に転じよう。1つは生理学的なものであり、もう1つは栄養学的なものである。両方とも社会のあらゆる階級の幸福と福利に密接に関わっていて、経済学の全領域にわたる最も興味深い問題を含んでいるゆえに、すべての著述家がこの問題を取り上げるほど、相互に関連し合った重大事である。前者、すなわち授乳の生理学的原理（physiological principle of lactation）は人口の増減を左右するものとしては、今日に至るも人口または生理学に関するどの著者によって統計学的に証明された試しはない。後者は国家的理由から、おそらくは主として、統治者の側の次のような潜在的な不安から殆ど関心を払われてこなかった。すなわち、統治者はそれを人口の増大（advance）を停止し、あるいはその幾何級数的な増加を予防する自然の定めし合理的な手段に指定しなかったのである。

本冊子で提唱した原理が正当であることを全否定できる人は誰一人としていない。統計上の数字に関する若干の取るに足らない変更や見積もりは統計科学の進歩に応じてなされる要があるかもしれない。しかしながらわれわれが現在有している知識の限りでは、ここまでで導き出した推論は極

めて十全なものである、本著で提起した諸点を裏付けるとても有益な情報が陸軍、海軍、及び東インド医療局から山ほど寄せられるであろう。それらは既に統計学に重要な組織立った貢献を行っている。本著で確立しようと試みた原理が読者の関心を引くことを望んでやまない。

#### 原注

- 1 B.ピセット・ホーキンス〔Hawkins, Francis Bisset, 1796-1894、キングズ・カレッジの薬物学(Materia Medica)の初代教授〕著『医療統計学』(ロンドン、1829年) 224頁。
- 2 〔国王書籍出版局(Majesty's Stationery Office)編〕『[連合王国及びその保護領の]歳入、人口〔商業〕等の総覧』〔ウィリアム・クロウズ, 1834年〕部。
- 3 科学アカデミー〔フランスのルイ14世によって創立された王立の学術団体〕で読んだ『ヴィヨ氏(M. Villot〔Frédéric Villot, 1809-1875〕)の回想』(1828)。『医療統計及び国家薬学論集』(ベルリン、1829年)。シャブロ氏(M. Chabrol〔Gilbert-Joseph-Gaspard de Chabrol de Volvic, 1773-1843〕)著『パリ市に関する統計的研究』(1823年)。
- 4 受胎の機会が3回に1回よりもはるかに低いということはかなりありそうである。ここで採用している数字はこの事についてなされた報告の中で最大のものである。現実には、おそらく通例が絶対的なものであり、例外は偶発的原因からの結果である。
- 5 〔アンドラル(Andral, Gabriel, 1797-1876、パリ医科大学教授)編〕『医学辞典』〔パリ、1829-36年〕第12分冊。
- 6 アッペ・グロシエ〔Grosier, Abee Jean-Baptiste, 1743-1823〕著『中国概観』(1788年)第2巻282頁。
- 7 『北アメリカのインディアンの間での束縛に関する回想』〔初版は1823年にロンドンのロングスマンから刊行〕第2版〔1824年〕、263-4頁。
- 8 『クォーターリー・レビュー』第47巻〔“Domestic Manners of the Americans. By Mrs. Trollope. 2 vols. 12mo. London, 1832.” The Quarterly Review, Vol. XLVII (March & July, 1832)〕、60頁。
- 9 『エディンバラ・レビュー』第123巻<sup>(4)</sup>、159頁。
- 10 『労働者の友協会<sup>(5)</sup>』第19号、287頁に収録されている論説「不要なばかりか有害である移民」。
- 11 大英国下院『[連合王国からの]移民委員会報告』〔1827年〕第3次。

- 12 ディロム〔Dirom, Alexander, ? -d.1830〕著『大英国の穀物法と穀物貿易、並びにそれらが王国の繁栄に及ぼす影響に関する探究』〔エディンバラ、1796年〕、244頁。アンダーソン〔Anderson, James, 1739-1808〕著『英国における現下の食糧不足をもたらした諸事情の洞察』(ロンドン、1801年)、36頁。
- 13 ウォーレス〔Wallace, Robert, 1697-1771〕著『古代と近代における人口に関する論考』〔エディンバラ、1753年〕、50頁。
- 14 『農業調査局への通信』第1巻〔W. バルメイ、1797年〕に収録された、アッベ・マン〔Man, Abbe, 1735-1809〕の論説。
- 15 カミロ・タレロ〔Tarello, Camillo, 1513-73、イタリアの農学者、クローパーを使った穀物の輪作法で特許をとった〕著『レオナトのカミロ・タレロ』(マントヴァ、1577年)。

#### 訳注

- 〔1〕スクロブは農業技術の進歩と広大な未墾地の存在を力説し、十分な人口維持力を主張した〔森下宏美著『マルサス人口論争と「改革の時代」』(日本経済評論社、2001年)129頁〕。なおスクロブの略歴は以下の通りである。ロンドン生まれのスクロブは1815年5月にオックスフォード大学に入学したが、翌年4月にはケンブリッジ大学に転学し、マルサスの学友で火山を研究していた鉱物学教授クラーク(Clark, Edward Daniel, 1769-1822)に師事した。その後、地所経営をなし、治安判事を経験し、農村における貧困問題に興味を抱くようになった。1831年には選挙改革を訴え、下院議員に当選したが、翌年の総選挙ではリカードウの息子に再選を阻まれた。しかしリカードウの息子が選挙違反で辞任すると、議席を回復し、爾後67年まで議席を保持した。〔森下同上書107-8頁〕。
- 〔2〕スペンサー伯爵(Spencer, John Charles, 3rd Earl Spencer, 1782-1845)はグレー内閣(1830-4年)及びメルボーン内閣(34年)で1830-4年に大蔵大臣を務め、選挙法改正で活躍した。また1838年に創設された王立農業協会の初代会長ともなった〔岩波書店編集部『岩波西洋人名辞典』(岩波書店、1956年)752頁〕。
- 〔3〕1790年以降ヤング(Young, Arthur, 1741-1820)をはじめ多数の識者が小屋住み農への小土地(例えば、自家消費用のジャガイモ畑地や牝牛1頭用の牧草地)割り当てを提唱していた。マルサスは第2版『人口論』(1803年)で、この提案を予防的抑制の作用を阻むものとして排撃したけれども、第3版『人口論』(1806年)の付録に至って厳格な付帯条件を付しながらもこの提案の一部を受け入れた〔拙論「2版『人口論』書評以降のA.ヤングとマルサスとの知

的交流」『長崎県立大学経済学部論集』第48巻第3号(長崎県立大学学術研究会、2014年)3-5、9-11頁]。

- [4] ちなみにこの巻は1866年1月～4月に発刊されているから、誤記であろう。ルードンは、実際には、同誌第61巻の中の、“State and Defects of British Statistics,” pp.159-60の記述によりながら、算出したように推される。
- [5] この協会は1830年にシャフツベリ伯爵 (Shaftesbury, Anthony Ashley Cooper, 7th Earl of, 1801-85) らによって創設され、小土地割り当てなど労働者階級の境遇の改善を目指した。44年には「労働者階級の境遇改善協会」に改組された。なお印紙税を免れた『労働者の友』誌は事実上、「全国労働者諸階級の同盟」の機関誌であったとされている〔トムスン (Thompson, Edward Palmer) 著市橋秀夫・芳賀健一訳『イングランド労働者階級の形成』(青弓社、2003年)870頁]。